いのち
仕上げの名台詞（めいせりふ）

札幌市医師会
札幌北クリニック　大平　整爾

避けることのできない死に臨んで、ひとはどのような言葉を残しつつ命を全うするものなのか。信義を重んじ主君に命を捧げている武士はいつでも死ぬことを念頭に置いていたのだと思うが、日頃から辞世の句なるものを心に秘めていたようだ。貴人や名だたる武将の辞世の句は、枚挙に暇がないほどであろう。かつては、長く培われた日本の伝統のひとつであったと考えられるが、今は考え方や形式を変えて事前指示書やリビングウイルなどになっているようである。死に臨んでどのようなことを言い残すのかは、その人の生きざまや死の床にあっての心身の状態や満足度などに左右されることは容易に想像できる。

もっとも、周囲の人々や後世の人による偽作や推測による言葉もあるのではなかろうかと、忖度される。闘病記などの類が盛んに出版される昨今では、市井の人々でも味わいのある言葉を残しているように感ずる。アルコール嗜好による肝硬変で死亡したとされているベートーベン（1770～1827）は、「友よ、拍手を。喜劇は終わった。」「残念だ。全く遅すぎたよ。」と言って息を引き取ったと伝えられているが、真意は分かりかねる。

ゲーテ（1749～1832）の最後の言葉は「窓を開けてくれ。明かりをもっと入れるように。」だと書かれているが、「もっと明かりを」または「もっと光を」と要約されて有名な辞世の言葉になっている。哲学的な意味合いを持つのか、あるいは低血圧などの身体状況がゲーテの視力や視野を損なっての医学的な意味合いからなのか、いまさら詮索しても詮方なかろうか。ドフトエフスキー（1821～81）は「君を残していくのがとても心配だ。これから生きていくのが、どんなに苦しかろう。」と妻に言い残しているが、素直に理解できる言葉である。「面白きこともなき世を・おもしろく・住みなすものは・こころなりけり」と謳ったのは、高杉晋作（1839～67）であったが、28年の短い生涯を思う存分に生きた気概が感じ取れる。

幕末の志士前原一誠（1834～76）は「これまでは・いかい御苦労・からだどの」(いかい＝大変)と、ユーモラスな言葉を遺している。

「ああ、おれは今まで何をやっていたんだろう。」は宇野重吉（1914～88）で、大仕事をやり遂げた人であっても、こうした感傷を抱くものなのであろう。

「あたしが万一いなくなった場合も、家の生活は平常通りよ。よくって。」とは女傑でもあった岡本かよ子（1889～1939）の言で、脳溢血で亡くなる１年前に夫君に言った言葉だという。心配の裏返しでもあろうか。「お前に思いが残って死にきれない。」と作家の織田作之助（1913～47）は妻に切々と言い残しているが、ドフトエフスキーと同様な心境をありのままに言い表している。「老人になって死でやっと解放され、これで楽になっていくという感じがする。」高村光太郎（1883～1956）は詩人にしては散文的な言い回しながら命を達観したかのような感慨を述べたが、前期高齢者の齢に達した身にはいささか分かる気持ちがする。田山花袋（1871～1930）は、「何しろ、だれも知らない暗い所へ行くのだから、なかなか単純な気持ちのものじゃない。」と死に際に言ったそうだが、万人の思いを代弁しているように思う。秀吉の逆鱗に触れて切腹を命ぜられて果てた利休（1522～91）は、「提ぐる我が得具足の一つ太刀・今この時ぞ・天に拠つ（なげうつ）」と怒りからなのか強い意志を感じ取れる。その秀吉（1537～

98）といえば、「露とをち・露と消へにし・わが身かな・浪速のことは・夢のまた夢」と言い残しているが、果たして世の有為転変を嘆いたのか達観したのか、直接聞きたいものである。

脳梗塞で倒れ最後の数カ月を自宅点滴で凌いだ私の父は「もう、いいよ。本当に、ありがとう。」と担当医で息子の私に言って息を引き取った。私には今でも、思い出される嬉しくもあり重い言葉である。多くの人が実に多種多様な事柄を、「いのちの総仕上げ」のその瞬間に言っているようだ。その感じ取り方が各人で異なることもあるだろうが、命に日々関わっている私共医療人に多くのことを示唆するものであろう。車谷長吉監修の「いのち　仕上げの名台詞」(小学館）のご一読をお勧めしたい。

公　園

札幌市医師会
国立札幌病院　荻田　征美

3年前、文字通り医者の不養生で脳梗塞で倒れた。以来、右半身の不全麻痺でリハビリを続けている。休日の朝、公園内を家内と共に散歩することもその一つである。有酸素運動等と称して30分位の歩行が手っ取り早い。3年も続けていると楽しみになって、休日の朝が待ち遠しい。健康に気を遣う人々が多くなってきた所為であろう、中高年では私たちのように夫婦で来ている人が目につく。他に犬の散歩をさせる人、ジョギングする人なども加わって休日の朝は結構、公園内の遊歩道は賑わう。

春は軽装のジャンパーに着替え、生暖かい風を首筋に受けると、その瞬間に待ちに待った季節の到来を実感して嬉しくなる。長かった厳寒の緊縛から一気に解き放された感覚は北国の住民のみが享受できる喜びである。レンギョウから始まって梅、桜、ツツジ、牡丹等、多種多様な花が一気に咲き揃う。その豪華な花の時期を過ぎると、公園は広葉樹の新芽が開いたばかりの淡い黄緑から1年を通して変わらない針葉樹の深緑まで揃った光景は緑の濃淡にぼかしを施した風景画である。次なる季節は今日も暑い日差しになるであろうと思いつつ、早朝の散歩の後に冷たい茶を木陰で飲みながら汗の引いていくのを待つのは夏の休日である。そして秋の散歩はいつもより少し時間がかかる。いそいそと予定の時を型どおりに終えてしまうには、あまりに惜しい目の前に展開する紅葉に目を奪われるからである。なぜ、個々の樹木が斯くも美しく変身できるものであろうかと、感心しながらいつもの散歩道を一巡するのである。やがて確実に来る冬に備えて贅肉を落として林立する木々には、ただナナカマドとマユミの赤い実が目につくだけになっている。木々の枝だけになると遠くの景色が透けて見えるのは、単調な景色の中にも空間の奥行きを感じて案外気がつかないおもしろさがある。

1月から3月まで雪の積もった公園内は散歩には不向きであった。それでもこの長い期間何もしないでいるには苦痛である。そこで元気な時分に時々楽しんでいた歩くスキーを試してみた。何とかできることはできたが、右側の支持力が弱く不安定であった。そのため膝を痛めたあんこ力士が捻り業に脆く横転するように、すぐどたっと転んでしまった。仕方なくやはり歩くだけにしようと決めた。他にもそのような方針の人たちがいると見えて、公園の遊歩道には人が一人歩けるぐらいの踏み固められた跡が積もった雪の中にできていた。歩いてみたが、不安定極まりない。道が細い上、人や犬が行き交うたびにどちらかの脇へ寄るために真ん中が凸になって踏み固められ、おまけに歩を踏み出すたびに靴がどちらかの側に横滑りするのである。一度我慢して歩いてみたが、いつもの倍くらいの時間がかかり、これは続行不能と諦めて公園を後にした。

公園散歩に対する拘りは消えず、ある時、公園管理事務所を訪ねてお願いしてみた。「雪が降るたびにとまではいかなくとも一冬に何度か、歩道の幅くらいの規模で、散歩ができる距離でよいのですが除雪はして貰えないものでしょうか。」する

と日直の人が、丁寧に対応してくれた。「お気持ちは分かりますが、市内の生活道路でさえ除雪車をフル回転しても手が回らないのです。まして生活に直結しない公園の遊歩道除雪など考えも及ばないところです。」言葉は丁寧であったが、「この輩は何をほざくか。」という気持ちがありありであった。確かに生活の面からその重要度の順序からすると「何を贅沢なことを言っているのか。」ということになる。最もなことである。私の言っていることは確かに贅沢なことかも知れない。しかし公園の遊歩道の利用はその序列には入らないのである。冬の間でもどのような人たちに公園を開放するかということが目的なのである。事務所の人には決定権もなく現状弁明のためには、私に対する答えとして仕方がなかったのであろう。が、半ばがっかりして私は帰宅し、その年の冬季間の公園散歩を諦めざるを得なかった。

春一番が訪れる気配を感ずる時期になって、我慢し切れず家内に言った。「歩きにくくてもいいからそろそろ公園に行ってみようよ。」そして久しぶりに公園に来てみて驚いた。まだ深い残雪の遊歩道に車が通れるくらいの除雪が施されているのである。私が公園管理事務所を訪ねた後、私の言葉を十分に考慮して、決定権のある上司に具申してくれたのであろう。上司の同意を得るためにも納得のいく説明も当然必要であったに違いない。そのやり取りを決して見ていたわけではないが、その様子が自然目に浮かんでくる。あの時、対応してくれた日直の人に感謝の気持ちで一杯になった。今年は根雪の時期が遅いが、やがて雪が降り積もっていくであろう。今年は断固として雪が降っても休みの日には公園に行くつもりである。

こんな文章を書いて出張に出かけ、帰って来たら一面雪野原であった。週末が楽しみである。

別離とクリスマス歌曲 テープコンサート

江別医師会
秋庭内科胃腸科　秋庭　功

昨年、私は突然大病にかかり、何度か死線を彷うこと８カ月の闘病生活だった。

最後の大手術を終えて、退院の許可をいただき11月末に帰宅した。それまでは生きることができるのかどうか半信半疑であったが、これでやっと心の方も前向きに梶をとれるようになった。

もう師走である。クリスマスも近い。この時を待っている家族・職員・入院患者さんたちと前のような生活を期待して外科病棟を後にした。

ところが、私を待っていたのは職員や職員の家族が重大な病気にかかっているとの窮状の訴えであった。私は退院したばかりで前のように無理はできない。再出発の希望は捨て、療養病棟を閉鎖しなければと決心して、家族と職員に計って了解してもらい、すぐ廃止に踏み出した。一番の問題は入院患者さんを説得し転院をしてもらうことで、今の厳しい時期に受け入れ先を探すことも難かしいことである。

クリスマスイブをそんな時に迎えた。

私が入院中に願っていたことの一つに、クリスマスの歌をイブに患者さんたちと一緒に今年も是非聞いて楽しむ機会を与えて欲しいということであった。それは、もし私が生きていなければ適わないことで、その願いをイエス様にお願いしていた。それは11月末の退院で適うかに思えたが、12月20日には高熱を出して危うかったが一晩で熱が下がり、ギリギリのところでイブを迎えた。

夜５時、だるい体を事務室に運んで、看護師・ヘルパーに手伝ってもらい全館放送のスイッチを入れた。飛び出してきたのは“赤鼻のトナカイさん”が“真赤のオ鼻の・・・”子供向けの曲が明るくリズミカルに流れはじめた。院内に溢れるサウンドを体全体に感じてきた。“サンタが町にやってくる”、“メリークリスマス、メリークリスマス神のみ子は今宵しも”明るい讃美する歌声は、クリスチャンではない私の暗い心を高揚せずにはおかない。少なくともこのイブは生きる一つの目標ではあった。やがて大人向けの“ホワイトクリスマス”が始まり、私は立ち上って１階の廊下に出て、ロビーへと散索した。心の奥から深く豊かにクリスマスを祝う名曲を感じさせる。さらに５曲

が流れて“アヴェマリヤ”が始まるところで、数日前の発熱からしていた抗生剤の静注をする時間になった。看護師が近くにいたのは、この注射のためでもあった。真っ白のベッドの上に横になって、数知れないくらい今までに注射を受けて固くなっている血管を腕を捲って差し出した。こういう血管は入りづらい看護師泣かせだが、患者の方も痛くて大変であるが、生きるためには仕方がないと覚悟して続けてきた。注射の瞬間体が強張ったが、一度に上手に刺してくれた。その間に曲は進みテープはA面からB面へ変えなければならない。ヘルパーさんに横に来てもらい切替え方を教えた。最後の“アーメン”が心地よく残り、B面に変わった。“諸人こぞりて歌いまする。久しく・・・”“主は来ませり、主は来ませり・・・”全館から溢れでるサウンドが共鳴して身も心も包み、至福の状態となる。静脈注射もやがて終わりになろうとしていた。病室よりヘルパーがやって来て、患者さんたちがすごく喜んでいることを告げた。療養型の患者さんのほとんどが高齢者でクリスチャンではないが、良い音楽は良い音楽と感じて喜んでくれているのである。この時、患者さん方も私も生命の限界を一時的に忘れていた。しかし、お釈迦様にしても生命に限りあることを教えている。イエス様にしても弟子のユダに裏切られ十字架に消えた。私の卒業した北大は建学の精神にキリスト教がある。しかし、今の風潮は必ずしもそうではない。世界も裏切り裏切られ、多くの人々が生命を縮めている。私が発病し多くの人々のご尽力で生命をとり止めてクリスマスイブを楽しんでいる。考えてみるとやはり今が幸福と喜ぶべきなのであろう。食堂には小さなクリスマスツリーを飾り点燈し、赤・青と交互に点滅している。窓に映って美しい。

“イザ歌え、イザ祈れ・・・、イザ称え、イザ歌え、イザ楽しき今宵、・・・イザ誉め称えよ”

私などはこれからどんなに努力しても誉めてくださる人もいないが、友人の中には誉められるべき人もいる。そういう人のことが頭を過ぎる。

“皆でメリークリスマス皆でお祝いしましょう。幸福がくるように”この歌を口ずさんでいると自分もその気になってくる。

“ジングルベル、ジングルベル鈴が鳴る。・・・メリークリスマス、メリークリスマス”小気味よいリズムとサウンド一偶然この曲が最後になってしまったが、この曲が最後になって良かったと思う。退院以前には私自身が皆の前を去らなければならない別離を考えていたが、帰った状況のもとでは、皆に転院してもらわなければならない事情の別れとなった。

いろんなことがあった。心停止後生き返った患者さんに困って、家族に転院させられた方や、明らかにお金の切れめが縁の切れめで担当医にまで態度が変わった人たち、私が床屋さんまでして少しづつ貯めてあげたお金を無駄に使わせてしまう人たち、“巧言令色鮮し仁”を地で行って、気づいた時には担当医の私が窮地に陥っていたり、テープレコーダーを持ち込まれていて青くなったこと、一般に患者が高齢者の家族の場合は患者にも医師にも冷たくなってきているようだ。だが、私が胸を張って言えることは、今まで全力投球をしてきて、自分から悔いることはないと思っている。

クリスマスイブには家族の了解なしに、先に患者さんに転院を話して不安がらせてはいけないとの思いから話していなかったので、不安なしにクリスマスの歌を楽しんでくれたと思う。翌日から家族との話し合いに大忙しで、29日には全員が行き先が決まり、当方で転院先に送り届けることができた。

このような別れだったので、患者さんには新しいところでの明るい希望を持って新生活を送ってほしいのです。イブの最後の曲を再啓上する。“ジングルベル、ジングルベル鈴が鳴る・・・、メリークリスマス、メリークリスマス”私が別れを秘めて患者さんに贈った別離の歌となった。私の心の中で今も繰り返し鳴り響いている。

最後にこの項を借りて大病から救けてくださった方々、何かと応援してくださり、ご心配をおかけした皆様方に心から感謝申し上げます。

スコットとウイルソン

胆振西部医師会
北湯沢温泉病院　御園生　潤

悲劇の人、F・スコット。南極探検に赴くが、その帰途、遭難して果てる。あまりにも有名な話であるが今回、数編の関連伝記を読む機会に恵まれたので改めて事実をたどってみた。すると、そこに記述されているのは、極めて厳しく悲惨な現実であり、あらためて、スコット隊への同情の念が沸いてきた。

スコット大佐は、南極大陸には実は２度赴いている。予備調査ともいえる第一次探検（1901～1904年）において、ある程度、南極大陸内部へと足を運んだが、最終目標の「極点制覇」まではなし得なかった。執念を燃やし、第２回目の南極探検に出たのが1910年。スコットには若妻と幼少の男の児があり、日本では、未だ、大正末期であった。

スコットは資金難にぶちあたっていた。当時の大英帝国は国力があったのであろうが、スコットは寄付、政府からの援助、演説などに頼るが予定額を下まわる。このため、探検船には中古の捕鯨船・テラノヴァ号を購入する。本船は建造後20年を経た老朽船で、航海中は水もれで船員たちを大いに悩ます。第２回目の探検には、航海途上のスコット隊に対して、ノルウェーのアムンゼン隊からの一通の電報が入る。「我らも南極点を目指す。」と。アムンゼン隊は当初、北極点を一番乗りで目指していたがピアリーらに先を越されてしまい、急遽ターゲットを南極点に向けたのである。こうして、スコットとアムンゼンのデッドヒートが繰り広げられることになる。

◇

私が、この、スコットの伝記に出会ったのは、当初、小学校の中学年の頃であった。当時の国語の教科書の教材には、こうした「伝記物」が数多く取られていたように思う。当時の学級担任が読書にかけては非常に熱心であったので記憶に深くとどまっているのであろう。

スコット隊は、当時としては斬新な発想とも言える雪上車（モーター橇（ぞり））とシベリア産の仔馬（ポニー）を投入して運行にあたるつもりであった。しかし、現実は甘くはなく、雪上車のうちの１台は陸揚げの途上で海中転落し、残りの２台もあまりの厳しい寒さに、ほどなく運行不能となった。ポニーも予想外の寒さにギブアップして最終的には全滅する破目となる。

見通しが甘かったと言われれば、それまでだが、はるか地球上の反対の土地から大切に輸送されてきた宝物が、このざまである。かような状況でスコット第二次探検隊は片道1,480㎞（東京～鹿児島間の距離に匹敵するという）の距離を徒歩ないしはスキーで歩む羽目となり悲惨な遭難の原因となる。さらに、同隊は行進途上では南極地域の気象・動植物・地質学的な研究、資料収集に時間を費やし、これまで全く未知であったこれらの事項を明らかにした功績は極めて大である。反面、その分、行路は遅延してしまったが…。アムンゼン隊は、これらの業務を全く行わず、専ら南極点一番乗りをめざす。彼らは犬橇使用のルールに徹し、途中で脱力した犬などが生じると、たちどころに殺し、人間と残っている犬たちへの食用に供した。こうした方針を忠実に貫いて、一歩も歩行することなく、アムンゼン隊は南極点への一番乗りを果たすのである。スコット隊の行動とは全く両極端であるが、この点が後々まで物議をかもす。

スコット隊がようやく南極点に到着した1912年１月には、既にアムンゼン隊が南極点到達をなし遂げていた。ひるがえるノルウェー国旗のもとに落胆したスコット隊の思いは察するにあまりある。すでに約１カ月前に先行されていたのだから。

落胆したスコット隊の最終探検隊５名が極点を踏んだ。足どりもおもく、帰路もはかばかしく進めない。凍傷のため途中でぬげた靴の感触がわからず、はき直すだけに２時間余りも要したと記録されている。一行は凍傷、転倒、雪盲で体をいためつけられる。途中で１名死亡。隊員たちを嘆かせる。さらに１名は「足手まといになる」と考え、自ら吹雪の中へ消え、その命を断つ。反面ア

ムンゼンは、この頃すでに悠々と基地にもどりつつあった。これも勝負と言ってしまえばそれまでか。

スコット隊は燃料も食料も十分に備蓄された―トンデポ（補給基地）に、あと、たった18㎞までに接近していた！　しかし天は味方せず、数日間続いたブリザード（吹雪）のためテントから動けず、食糧、燃料が底を尽き、残りの３名は結局凍死してしまう。テント内には殉死する羽目となった隊員の遺族へスコットがあてた手紙がていねいにしたためられ、後日発見されている。スコットの良き友であり、良き理解者であった、医師ウイルソンの亡骸は、スコットと共に寄り合うような姿でテント内で発見された。まるで丁度お互いをかばい合うようにして。こうした遭難報道が本国・英国に伝わるのに当時は半年余りもかかっていたというから驚きである。

ウイルソン医師は本業の他、動物学、地理学、地質学、画家などといったふうに多彩な才能の持ち主であったという。どちらかというと感情の起伏の激しかったスコットと比べて、温厚な人柄として皆に親しまれていたそうである。

どこの国にも、どの時代にも、いわゆる「判官びいき」の感情は存在するらしく、今日まで「悲劇の英雄」としてスコット隊が扱われているのかもしれない。

◇

高校時代に受験した某予備校主催の公開模試の英文解釈の問題に難儀するスコット隊を著述した文章が出題された。さらに、その後、当時実写されたスコット隊の活動を伝える貴重なモノクロフィルムがNHKテレビで放映された。臨場感あふれる字幕映像であった。BGMには、確か、英国の作曲家・エルガーの行進曲「《威風堂々》第１番より」が採用されていたと鮮明に記憶している。最終的な極点攻略の場面の映像はなくウイルソンの描いたスケッチが放映された。

◇

今日の極地探検は大きく様変わりし、進歩している。随時、隊の動向や状況を無線で基地に伝え、各種の指令がとぶ。途中で不足したり、不都合な事態（病人など）が生じると、即座に基地から「ヘリ」が飛び空輸されてしまうというから、時代もかわったものだとつくづく感じてしまう。

◇

1958年に設置された、アメリカ合衆国の南極基地はこれらの両英雄をたたえて「アムンゼン＝スコット基地」と命名された。アメリカ合衆国の心広い計らいであろう。

参考図書

アムンゼンとスコット　本多勝一集28　朝日新聞社　1999年

お知らせ

日本臨床泌尿器科医会
第２回臨床検討会のお知らせ

日　　時：平成16年７月18日㈰

場　　所：ルネッサンスサッポロホテル
B１「ボールルームⅠ」
札幌市豊平区豊平４条１丁目1-1
TEL（011）821-1111

10：00～12：00　１．前立腺生検の方法と麻酔
２．膀胱鏡検査の麻酔
（成人、男子）

13：00～15：00　３．クラミジアによる尿道炎の診断と治療

15：30～　特別講演（演題未定）

17：30～　懇親会

参 加 費：5,000円（懇親会費を含む）